

2006年2月3日

陳 述 書

小林 史 高

私はワインを販売し、またワインについて教えている人間です。

対象としているのはフランスワインをはじめとする世界中のワインです。

ワインは単なる美味しい飲み物というばかりでなくその生産地の歴史文化をその背景に色濃く付帯しているもので、ワインを飲む、ワインを語るということはそのままその生産地、生産国の歴史文化に触れ、語ることといえます。

私はそうしたワインを仕事として扱うことにより、ただの商品としてばかりではなく他国の歴史文化、美学、価値観をも日本人たちに伝えることができていると思っています。

つまり私は単にワインを売ることや単純な知識を伝えるばかりでなく、生産国との異文化交流、異文化理解に役立ちたいという気持ちで仕事をしているわけです。

世界中のさまざまな文化はわれわれ日本人の文化とは微妙に、または大きく違っており、しかしそれぞれに固有の価値とすばらしさを持っています。

その違いを理解し、敬意を払うことによってこそ、異文化に属する人たちが我々日本人の歴史文化を理解しようとする努力が敬意を払ってくれるものと信じています。そしてワインを売り、それについて教えるという仕事はその手段に充分になりうると考えています。

さて、このたびの石原都知事の暴言は自分の立脚する文化以外を認めようとしないう、大変偏狭な観点からなされています。フランス語は数が数えられない言語などという論説が誤りであることは論を待つ必要もありませんし、また過去、この法廷でもさまざまな人がそれを論証していますのでここでは私は触れるつもりはありません。それよりも私は都知事という公的な立場の人間のこのような愚かしい発言が私に及ぼした害害について述べたいと思います。

ある文化が最高の位置にあり、多文化が「下」で「野蛮な」「未開」のものであるという考え方は過去世界中に多くの被害を及ぼしてきました。我々日本人にとって近い事例でいうと太平洋戦争のとき、日本の軍隊が日本国民に強いた思想もその良い例です。何者かを侵略し、あるいは苦しめ、殺す際にその行為を正当化する上でこうした思想はまことに都合の良いものといえましょう。

異なる文化に属する人間がこうした考えに基づいて対峙したときそこには暗い未来しかありません。

私は日頃からそうしたことに仕事を通じて対抗していきたいと思っています。

ワインは食品です。しかも大変に美味、そして健康的で世界中にその楽しみを知っている人が大勢います。そして美味しいものが並んでいる食卓には世界中どこでも笑顔があります。

コミュニケーションを円滑にするために、食事をともにするというのは、たとえば恋人たちがレストランで一緒に食事をするというレベルから始まり、学生の部活動の合宿、さらには国家の代表同士が晚餐をともにするケースにいたるまで人間が文化を築いてから今まで少しも変わらずに行われてきたことです。中世ヨーロッパの貴族社会では自宅に人を招いて同じ皿から食物を取り、同じ瓶からワインを飲むということは相手に対して「毒を盛っていない」という意思表示であり、すなわち敵ではないことを意味していました。日本でも「同じ釜の飯を喰う」という表現が生きていて、そこにはある種独特の「同士」への感傷的とも言える愛情が含有されているといつてもよいでしょう。ワインはそうした席での一種の世界共通語ともいえます。そしてワインのそうした位置を築いたのがフランスワインであることには誰も異論は唱えないでしょう。

私はフランスワインを多く扱う人間として、たびたび彼の地を訪れ、われわれ日本人にとってのワイン、日本の食卓におけるワイン、日本を含む世界中のワインについて意見を交換し、またそればかりでなく食文化をはじめとするお互いの歴史文化全般について語り合い、酒を酌み交わしてまいりました。そして日本で異文

化理解の重要性を、ワインを売ること、ワインについて教えることを通じて伝えてきたつもりです。

異文化を理解することは、完全には不可能なのかも知れません。

しかしこうした不断の努力の積み重ねが、異文化間で何かのトラブルが起きたときに、両者に争いが生じたときに、その被害を最小限に抑える有効な力になりうると信じています。世界中の権力者たちが頻繁に食事をともにすればもっと殺し合いが減るのではないかとすら思われるくらいです。

私は大げさに言えば、仕事としてワインに接することにより国際交流、異文化理解、さらには世界平和に貢献したいと思っています。

石原都知事のかの暴言は、そうした観点とはまったく逆の価値観に立ってなされています。都を代表する公的立場の人間がこのような発言をするということは、異文化の人たちに石原都知事のような考えが日本では一般的な考えなのだと誤解させる可能性が大いにあり、また日本人の品格や教養を疑らせるに充分であろうと思われる。そのため私はフランス人ばかりでなく異文化の方々に会うたびにこれことを話題にし、私はまったく違う考えであるということ、あの暴言に怒りをもっていること、そしてさらに日本には私と同じ気持ちであろう人々が多いということを意思表示せざるを得なくなりました。

言ってみれば私たちがせっかくこつこつと積み上げてきた積み木を横からなぎ倒したのが石原都知事の暴言なのです。

それはまさに私にとってある種の傷害事件と言えます。

私が原告に名を連ねたのは、そうした被害に対する訴えのほか、あの暴言にこのように公的な場で異論の声を上げ抗議することがそのまま異文化の人々に対し、日本人が愚かな民族ではないこと、日本人の多くが怒り嘆いていることを伝えることにもなるからです。

「権力は腐る、絶対権力は絶対腐る」といいますが、あの暴言はまさに権力者の思いあがりによる「腐敗」そのものと言えるでしょう。それをそうさせないためには我々国民が権力者を注意深く見つめ、誤りを起こしたときにはそれを正すよう行動をするしかありません。

今回の石原暴言により私は迷惑をかけた異文化の方々に謝って回らなくてはならなくなりました。それはまるで親の犯した不祥事を子が尻拭いをして回っているようなものでありますが、今、真に必要なことは、誤りを犯した本人がそれを認め失礼をした相手、迷惑をかけた我々に対して謝罪することです。これは我々の権力を代行すべき責任ある人間の義務といえるでしょう。

また潔く謝罪してこそ、真の日本男児とはいえますまいか。

弁明にもなにもなっていない非論理的な言い訳ばかりをのらくらと繰り返し、ただほとぼりが冷めるのを待っている石原都知事はまさに本来の日本の美学に反するまさに日本の恥であり、彼が今後もこの件について一切の訂正も謝罪もしないとすれば、これから国際人となってゆかねばならない日本の若い世代に「異文化は日本文化より劣っている」という考えばかりか「責任ある立場に立っている人間は逆にその責任をまっとうしないでもなんとかなる」という思い上がりと思しき慣習とをも植え付けることになるでしょう。

石原都知事はフランス文化に属する人々ばかりでなく我々日本人に対しても様々な意味で、訂正と謝罪をする必要があるのです。

以上